

[音 楽]

子供が即興的に歌で掛け合う要素の研究

－わらべ歌を元歌にした掛け合い歌の実践から－

吉村 智宏*

1 研究の動機

筆者は、音楽の価値を「美しいもの・感動するもの」という側面だけで捉えて授業を構成するだけではなく、「自分の気持ちを表すもの・他者とコミュニケーションをとるもの」という側面で捉えて授業を構成していくことが大切だと考えてきた。平成29年に告示された新学習指導要領では、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」という文言が示された。音楽が既成の楽曲を表現する「再創造」だけでなく、自ら音楽の作り手になって「創造」し、自己表出や他者とのコミュニケーションをとるような学習が一層求められてくる。

音楽の創造、つまり「音楽づくり」によるコミュニケーションは、子供にとって決して難しいことではない。伊野(2014)は、「日本の子どもは、もともとわらべうたのように、自分の好きな歌を歌い、作り替え、相手に伝えることを自然に行ってきた」と述べている。子供は、自然につくり歌でコミュニケーションをとることができていたという事実を読み取ることができる。吉村(2018)は、子供が文句を考え、歌づくりを行う過程では、「元歌にある文句の語感と節との兼ね合いを基盤にしながら、文句の収縮や産み字による調整、文句の修正、節の付加や反復といった技能を用いながら歌づくりを行っている」と述べている。しかも、それら技能の殆どは、新規の技能として子供が得るものではなく、日本語を話す日常生活の中で自然と身に付けてきた技能である。

しかし、これらつくり歌が生まれる過程には、「元歌の選択」「文句の作成」「文句と元歌の微調整」といった、いくつかの段階が必要になっており、それらの段階を解消するのにいくらか時間が掛かってしまう。つくり歌で「自分の気持ちを表す」ことができて、それに対する返答が即座になればコミュニケーションが成り立たない。「美しい音楽・感動する音楽」の場合、奏者の達成感や聴き手の満足感が充実し、場面を共有することで表現として昇華されるが、このつくり歌の場合、そうした効果を期待するのではない。むしろ、自分が何気なく投げ掛けた歌が歌で返ってくる、まるで普段の会話のようなコミュニケーションで成り立つ表現なのである。そこで、筆者は「歌が歌で返ってくる」という点に教材性を見出し、ブータン王国にツァンモと呼ばれる歌謡があることに着目した。

ツァンモは同性同士、男女間、年配者や子供同士でも行われる掛け合い歌である。権藤ら(2014)の調査によると、ブータン人は、日常生活の中や法要等で親戚が集まった時に、ツァンモで遊ぶこともある。ツァンモはブータン人の日常に根付いた歌謡であり、コミュニケーションツールであることが分かる。こういった歌の姿は、冒頭で提唱した音楽の「自分の気持ちを表すもの、コミュニケーションをとるもの」という例であると言える。なお、このツァンモであるが、成立する条件として、歌い手がツァンモの詩文を知っていなければならず、ストックされた詩文の中から、その場に適したものを選んだり、替え歌にしたりしながら掛け合っていくこと、時に全く新たな歌詞を即興的に作り出して掛け合っていることが調査から報告されている。

このツァンモの事例から、掛け合う時に子供がいくつかのつくり歌をストックしておくことで、その場に適したものを選んだり、替え歌にしたりしながら、掛け合い歌を成立させ、時に即興的なつくり歌による掛け合いも行われるのではないかと考え、実践を行った。

2 研究目的

掛け合い歌の時に、つくり歌をストックしておくことで、子供はその場に適した歌を選んだり、即興的に歌をつくったりするのかを検証することを目的とする。さらに、即興的なつくり歌を生み出す要素を、発話行動記録やインタビューから明らかにしていく。

*長岡市立表町小学校

3 研究の内容と方法

- (1) 期間：平成29年11月
- (2) 対象：5年生38名(男子24名, 女子14名)
- (3) 題材：「私とあなたが歌でつながる」
- (4) 分析方法

本研究は、題材「私とあなたが歌でつながる」の実践で、子供が歌を選択しながら掛け合う様子や、即興的な歌づくりで掛け合う場面を抽出し、発話行動記録に残す。それに分析や考察を加え、つくり歌をストックすることにより、掛け合いで歌を選んだり、即興的に歌をつくったりするのかを検証を行う。さらに、発話行動記録やインタビューから、即興的なつくり歌が生まれる時の要素も明らかにする。また、子供は歌をつくる際の「文句の収縮や産み字による調整」「文句の修正」「節の付加や反復」といった技能を既に習得している。なお、本稿における歌づくりとは、子供が歌をつくる行為を示すものであり、つくり歌とは歌づくりによって生み出された歌を示すものである。

4 実践の内容

本実践は表1の指導計画で展開した。なお、プータンにはツァンモを使った3人程度のグループ対抗の掛け合い合戦がある。本実践では、掛け合いの合戦は行わないが、このツァンモの例に習って、3、4人のグループごとの掛け合いを行うことにした。

表1 「私とあなたが歌でつながる」の指導計画

時	○主な学習活動
1	○教師がつくりためた歌を使って、掛け合い歌を行う。 ○いろいろなわらべ歌や民謡を元歌にして、グループで子供がテーマにそった歌づくりを行う。
2	○つくりためた歌を使って、グループごとに掛け合う。 ○つくりためた歌がなくなった場合、即興的な歌でつなげる。
3	○掛け合い歌発表会を行い、グループごとの掛け合い歌の批評をする。

5 子供の実際と分析、考察

本実践における子供の実際を示す。ここでは、1時間ごとの学習の様子を子供のつくり歌と発話行動記録で示し、分析と考察を加えていく。

(1) 第1時：体験談を歌にする様相

第1時は、教師が事前につくりためたつくり歌で、希望した子供のグループ(3名)と掛け合い歌を行った。つくりためた歌のテーマは、「吉村少年の事件歌(吉村は筆者の名前)」で、これまでに何気なく子供に話していた担任の昔の失敗談を文句にして元歌にのせたものである。1枚のカードに1首の文句が書いてあり、全部で10枚のカードを用意した。担任と子供のグループで5枚ずつ無造作に配布して掛け合い歌を行い、学習内容を示した。表2は、この時に示したつくり歌の一部である。元歌は<うさぎ>(日本古謡)である。なお、矢印は掛け合った順の一例である。

表2 担任が示した掛け合い歌

担任	立候補した子供のグループ
吉村少年の 事件を歌おう 5年生の時に 教室走って 机にひっかかって 顔面衝突 痛かったよ	吉村少年の 事件を歌おう 中学生の時に 卓球してたら 選手のみぞおちに 偶然パンチして ラケット飛んでって 相手の頭に ぶつけてしまったよ
吉村少年の 事件を歌おう 6年生の時に 給食当番 走って転んでみんなの牛乳 割ってしまったよ	吉村少年の 事件を歌おう 2年生の時に 裸足で走って 画鋸が刺さって 痛かったよ

矢印のような順で掛け合いのやり取りを10首分行い、担任の番で持ち歌がなくなるようにした。なくなった場面で、担任が即興的な歌づくりを行った。担任の即興に子供は少々驚いたが、「つくりためた歌がなくなったら、その場で即興的に作ってよい」ということを伝え、「グループで、できるだけ長く掛け合える」という目標も設定した。

テーマを「楽しかった学校生活の思い出歌」に設定し、それぞれのグループで歌づくりに取り掛かった。1人1枚以上、文句を書くカードが渡るようにした。本時だけで、グループによっては10首の文句を作成した。

表3に子供がつくりためた歌をいくつか紹介する。ローマ字は本研究における子供のニックネームである。なお、子供のつくり歌の多くの元歌が<うさぎ>であった。

表3 子供のつくり歌の例

スター学年の事件を歌おう 米作りの時にカモが脱走して みんなで追いかけて 大変だったよ	Syuto少年の事件を歌おう 下水道見学の時の説明聞いてたら 鼻のかさった取って 鼻血が出たよ
Kunaの事件三人で歌おう お父さんの部屋で素振りをしてたら バットがガラスに当たってしまって ガラスが割れて 怒られたよ	学校生活の思い出歌おう 5年生の時は親善音楽会でたたいてふいて 歌っているんなことして 楽しかったよ

子供のつくり歌から分かるように、純粋に楽しかった学校生活の思い出である内容の文句もあったが、怒られた話やけがをした話といった内容の自分の失敗談が多く見られた。これは、導入時に担任が示したつくり歌によるところもあると考える。

(2) 第2時：ストックされた歌で掛け合う様相

第2時は、子供がつくりためた歌を使って、グループごとに掛け合う活動を行った。本時の目標は、「できるだけ長く掛け合おう」である。

最初、グループごとにつくりためた歌を練習する時間を設定し、10分程度練習を行った。その間に新たな歌づくりに取り組む子供もいた。

その後、ペアになるグループで掛け合いを行った。それぞれのグループで対面や円の形で、互いの顔が見えるように掛け合った。手拍子や身体の揺れで拍を取って、歌を合わせたり、歌を歌で返す時の間を揃えたりする様子が見られた。つくりためた歌を選択する時の子供の様子から次の3つの方法が見られた。

- ① グループ内で歌を歌う子供と歌を選択する子供に分かれる方法。役割分担をする方法と捉えられる。相手グループが歌っている時に、その内容から関連する内容の歌を子供が選択し、歌う子供に文句が書いてあるカードを渡す。
- ② 相手グループが歌っている時に、グループ内の総意で歌を選択する方法。これも相手グループの歌の内容を聞いて、関連する内容の歌を指さしなどで選択をしていた。多数決やリーダー性のある子供の意見によって選択される傾向が強かった。
- ③ 相手グループの歌の内容に関わらず、並べておいたカードの順番で歌を返す方法。

これらの方法から、①・②では、相手グループの歌を聞き、それに呼応するような文句の歌を返すといった歌によるコミュニケーションの様子が見られたが、③では拍や間を揃える様子が見られたものの、手元にある歌を出てきた順に歌っただけなので、文句の関連を意図的に図ったとは考えられない。しかし、テーマが「学校生活の思い出」で共通した内容であるので、ある程度の関連性もある。この段階では、掛け合い歌の場面で、ストックされた歌の中からその場に適した歌を選択するかどうかについては、十分な検証ができず、曖昧さを残す形となってしまった。

ここで、ペア内での掛け合い歌の例を示す。

表5 ペア内での掛け合い歌の例

A1グループ	A2グループ
学校生活の楽しかった思い出 3年生の時にリコーダーのコンサートで 「夏祭り」と「あとひとつ」を 吹いたんだよ	2年生の時に、野菜を作って 食べてみたらおいしかったよ
学校生活の痛かった思い出 1年生の時に羊をかって、頭突きをされて投げ飛ばされて 痛かったよ	幼稚園児の時に 誰よりも早く来ていたからドアのかぎが しまっていたよ ※こうした掛け合いがしばらく続いた

途中、A1グループの子供から「どうしよう、歌がなくなってきた」という声が聞かれた。そこででのやり取りの発話行動記録を示す。下線は筆者による。

表6 A1グループの発話行動記録

番号	話者・行動者	内容、発話記録、行動記録
		(Aグループの歌の残りが少なくなってきた。ペアのBグループが歌を歌っている最中)
1	Kuna	「 <u>どうしよう</u> 。(つくり歌が)もうないから、歌えないんじゃない。」
2	Miki	「 <u>どうする？</u> 終わるよ。」
3	T	(それを聞いて)「 <u>即興で歌えない？</u> 先生がさっきやったみたいに。」(この辺で、掛け合いが終了する。)
4	Keitatu	「 <u>歌えるっちゃできるかもだけど、自分が考えたことをみんなに伝えられないから一緒には歌えない。</u> 」
5	T	「あぁ、そうか。それもそうだね。そうすると一緒には歌えないか。そしたら、一人でつなげていいよ。」

ここでの問題点は、「つくりためた歌がなくなってきた、掛け合いがつながらなくなった点」と「即興で歌う場合、即興でつくった歌をグループ内に伝えることができない点」である。本実践に取り組む段階で、こうした問題が生じることは予測していたが、子供に「なんとかつなげたい」という思いと「即興で歌えそうだ」という自信が生まれた段階で対応しようと考えていた。こうした思いや自信は1「どうしよう」(つなげたいけれど、できない)や3「歌えるっちゃ〜」(即興でつくり歌ができそうだけれど)の発話から認めることができる。なお、この場面は各グループが掛け合いを始めて10分程経過したときである。

Tの提案のあと、A1とA2のペアに表7のような掛け合いの姿が見られたので、やり取りを発話行動記録に示す。歌を歌っている場面は♪の箇所である。なお、PPは特定できない複数の子供である。

表7 A1グループとA2グループの掛け合いの様子

番号	話者・行動者	内容, 発話記録, 行動記録
1	Keitatu	(表6でのTの提案を受けて) 「じゃあもう一回最初っからやってみよ。」
2	Kuna	「いいよ。」
3	PP	(最初から掛け合いを始める。グループで手拍子をつけて、拍を合わせる。A1グループのつくりためた歌がなくなり、A2グループのつくり歌が歌われている最中。)
4	Keitatu	(挙手をして)「♪Okanoya Keitatuの事件を歌おう 保育園の時に給食食べてて、牛乳飲んだとき、友達に笑わされて、吹き出したよ♪」
5	Kuna/Miki	(同時に挙手をして、MikiがKunaに譲るそぶりを見せる)
6	Kuna	(挙手をして)「♪Yamagisi Kunaの事件を歌おう 2年生の時に廊下を走って、頭をぶつけて、先生に怒られたよ♪」
7	Miki	(この後、Mikiが歌ったところでTが声をかけ、掛け合いが終了した。)

4と6、7のKeitatuとKuna、Mikiはつくりためた歌ではなく、即興的なつくり歌で掛け合いを行った。相手の歌を聞きながら、少し考えるような表情をした後、挙手をして周囲に歌う意思があることを示して歌い出したことが共通した動作である。内容は、いずれも歌い手の失敗談であったことも共通している。この最中、周囲は一貫して手拍子で拍を取り、掛け合いが続くようにしていた。A1とA2グループに即興で掛け合い様子が見られたので、一旦活動を中止し、A1とA2グループを範にして、全体に以下のことを伝えた。

- ① つくりためた歌がなくなった場合、誰かが即興で歌ってよいということ。
- ② 即興で打ち合わせができないので、一人で歌ってよいこと。
- ③ A1グループとA2グループの交互の掛け合いでなくてもよいということ。

この指示の後、即興的なつくり歌で掛け合う子供の姿が各グループで見られた。

第2時の終末に、即興的なつくり歌で掛け合いたいという子供がいたので、挙手をした4人が皆の前で掛け合いを披露した。掛け合いの最中、聞いている子供は、手拍子を行った。これは、拍を途切れさせないようにしながら、音楽のまとまりを保持しつつ、歌で掛け合っている姿と捉えられる。

第2時の子供の実際から、つくりためた歌で掛け合いを続けることで、即興的につくり歌を生み出すことができた。ここで考えられる、即興的に歌で掛け合う要素は以下である。

即興的なつくり歌が生まれる時は、「掛け合いをつなげたい」という欲求と「即興で歌えそうだ」という自信が必要である。それらは、手拍子などで拍を合わせることによって生まれる「掛け合い歌を行っている」という場によって醸成される。なお、この手拍子は音楽のまとまりを形成する重要な要素であり、拍を保持することで掛け合いが継続されていると考えられる。即興で歌づくりを行う場面では、つくり手の歌を仲間を示す時間や方法がないため、文句をグループ内で共有することはせず、つくり手が単独で歌い手となる。

掛け合い歌を続けていくことで即興的な歌づくりに取り組む様子が見られたが、この段階では、それぞれの子供の中でどのような過程を経て即興的な歌づくりにつながっているかが不明なので、この分析と考察は第3時で行うことにする。

(3) 第3時：即興的につくり歌を生み出す様相

第3時は、子供がつくりためた歌を使って、即興的に掛け合う活動を行った。本時の目標は、「私も即興で掛け合える」にし、どの子供も即興的なつくり歌で掛け合えることをねらった。計画では、掛け合い歌の発表と批評を行う予定であったが、第2時で即興的なつくり歌で掛け合う姿が見られたため、追検証と即興で掛け合う際の条件や要素を明らかにしようと考えた。

第2時の終末場面での掛け合いを子供たちは見ているので、目標となる掛け合いの様子は共有することができていた。活動に入った段階での掛け合いを行う様子の発話行動記録を示す。下線は筆者による。

表8 第3時の掛け合い場面の発話行動記録

番号	話者・行動者	内容、発話記録、行動記録
1	Kaimu	(即興での掛け合い場面、同じグループの子は手拍子をしたり、拍に合わせて体を揺らしたりしている。)
2	Rion	「♪自転車で 走って暴れてたら 前を見ないで 木にぶつかったよ♪」
3	Syuto	「♪Nisizawa Rionの痛かった思い出 幼稚園の時にバスに乗るとき 鼻血が出て 友達の肘が もう片方の鼻にぶつかって どっちもの鼻から 鼻血がでたよ♪」
4	Rion	「♪Syuto少年の事件を歌おう 学校のグラウンドで 走っていて かさぶたはがれて血が出てきたよ♪」 「♪Nisizawa Rionの痛かった思い出 体育館で鬼ごっこしたら <u>バス…あ</u> 鬼ごっこしたらバスケットコートの下を通ったら バスケットボールが落ちてきて 痛かったよ♪」 (以下、即興的な掛け合いがしばらく続いた)

表8の様に、即興的なつくり歌で掛け合いをする様子を多くのグループで確認することができた。即興で歌う場面では、手拍子をして歌いながら視線をやや上にあげて歌う姿を確認した。これは、文句を即興で作りながら元歌に乗るように微調整をしている様子と考えられる。また、4のRionでは下線部「バス…あ」のように、つくり歌を歌い直す様子が確認された。しかし、「間違えたからもう一度」となるのではなく、拍の中で自然と歌い直し、最後まで歌い切る様子が見られた。やはり、手拍子によって拍を持続させ、音楽のまとまりをつくっている姿と考えられる。こうした様子は、いずれのグループでも確認された。

ここで、第3時の終末場面での教師による子供へのインタビューを示す。インタビューの内容は、「即興で歌を歌う時の方法」である。下線は筆者による。

表9 インタビュー時の発話行動記録

番号	話者・行動者	内容、発話記録、行動記録
		(グループごとの掛け合いを終了し、最後に集合している場面)
1	T	「では、振り返りをしたいと思います。ちょっと尋ねるね。みんなから聞きたいんだけどさ、じゃあまず、『即興で歌うことができたよ』という人」
2	PP	(6～7割の挙手)
3	T	「お～すごい。じゃあ続けます。即興で歌う時に、こうやったら即興で歌えたなっつのはありますか？」
4	Kaimu	(挙手をする。)
5	T	「お。じゃあKaimuさん。」
6	Kaimu	「 <u>最初に3つ取つといて、で、友達と協力して、友達と相手が歌っている時に思い出して、それを繰り返すと永遠に…</u> 」
7	T	「3つ用意しておいて、友達が歌ったのを聞いて…」
8	Kaimu	「で、なんか思い出して、…」
9	T	「つなげるってこと？」
10	Kaimu	(うなずいて)「あと、 <u>思い出せなかったら、自分のなんか探して…</u> 」
11	T	「ああ、探すの。 <u>相手が歌っている時に、探すってこと?</u> 」
12	Kaimu	(うなずく)
13	T	「なるほどね。まだありますか?他に。」
14	PP	(挙手なし)
15	T	「じゃあ、大体Kaimuくんと同じってこと？」
16	Rion	「 <u>相手が歌っているときに、考えるのが同じ。</u> 」
17	T	「 <u>相手が歌っているときに考えるのが同じなの。</u> 」
18	Miki	(Mikiが話し出す)
19	T	「じゃあ、Miki君。」
20	Miki	「 <u>最初に題だけを考えておいて、それで、それ以外のことは何にも考えないで、とにかく1個歌ったら、歌ってる最中に他のことを考えて…</u> 」
21	T	「自分が歌っている最中に、もう1つ考えているってこと？」
22	Miki	「はい。それで、また相手が歌っているときみたいに、また何個かやるから、1回の返ってくるときに、Kaimu君みたいに、何個か考えられるから、 <u>それでまた1個歌っている最中にもう1個考えて、そうやってどんどん続いていくから…最初に題だけを決めていく。</u> 」
23	T	「ふ～ん。題を、テーマを決めるってことね。じゃあ、もうちょっと教えて。歌う時って、歌が入ってるの?それとも、文句だけ?」
24	Kaimu	「 <u>もうテーマが入ってて、その時に、考える。</u> 」
25	T	「このこと歌おうかなってのはもう出てる」
26	PP	(複数の子供が話して、聞き取れない)
27	Rion	「♪Nisizawa Rionの痛かった思い出♪の時に、もう考えてて、 <u>考えているのを歌っている時に、また考えて…</u> 」
28	T	「じゃあ、みんなはすごい速さでテーマを考えて、すごい速さで言葉を考えて、それをすごい速さで歌に当てはめちゃうってこと?」
29	PP	「まあそんな感じ。」
30	T	「すごいじゃん。そんなことしてたの。」

2から「即興的につくり歌で掛け合えた子供」が学級の6～7割であったことが分かる。第2時では、実際に数えたわけではなく、実際の数は正確ではないのだが、即興で掛け合えた子供が、全体の2～3割であった。これにより、歌づくりの積み重ねとつくり歌のストックが、即興的な歌づくりに影響していると考えられる。このつくり歌のストックの重要性は、6の「最初に3つ取って…」という発話と10の「思い出せなかったら、自分のなんか探して…」という発話からも関連付けることができる。「3つ取ってく」は歌のストックであるし、「歌を探す」も自分の引き出しに歌があることを示唆している。つまり、つくり歌のストックから、その場に適した歌を選ぶという行為は、この場面で現れたと考えられる。

次に、即興で歌をつくる思考過程について考えたい。11の「相手が歌っている時に、探す」や20「歌っている最中に他のことを考えて(中略)最初に題だけを決めておく」、27「♪NisizawaRionの痛かった思い出♪の時に、考える」といった発話から、相手の歌を聞いている最中か自分の歌い出しの最中、もしくは、その両方の時に、同時進行で歌づくりを行っているということが分かる。そして、つくり歌はある程度共通したテーマに沿ってつくられたものである。つまり、極めて短い時間で、歌の内容を認識し、それに返す共通したテーマの文句を編み、節に乗せて歌い返すという作業を行っているということである。こうしてみると、とても高度な歌づくりの過程を経ている印象を受けるが、こうした過程は私たちの日常の会話の過程と似ていると考えられる。それは、日常の会話に置き換えて考えるならば、「相手が話している内容を聞いて、自分が話す内容を決定する」とほぼ同様の過程を経ていると捉えられるからである。違いは、それを元歌の節や拍に乗せて歌にしているかどうかである。

第3時の子供の実際から、即興的なつくり歌が生まれる要素として、次のことが言える。

即興的なつくり歌が生まれるには、共通したテーマのつくり歌のストックが3曲程度必要である。これらストックの中から、次に歌う歌を選択することができる。また、即興で歌をつくる過程は、相手の歌を聞いている時や自分の歌い出しの時、もしくはその両方で文句を編み、即興で元歌の節に乗せる作業を行っている。この過程は、私たちの日常の会話の過程と似ていると考えられる。

6 結果

本実践の結果、子供はつくり歌をストックしておくことで、掛け合い場面で適した歌を選択したり、即興的なつくり歌を生み出したりすることができたと言える。

本研究で明らかになった、掛け合いで即興的な歌を生み出す要素は以下である。

- ① つくり歌のストック
- ② 掛け合いを行っている子供たちが共有している場から醸成される「掛け合いを続けたい」という欲求
- ③ 音楽のまとまりを形成する拍感の共有
- ④ 共通したテーマに沿った文句を編んだり、選んだりする技能
- ⑤ 編んだ文句を元歌の節に乗せて、歌い切る技能

これらは、特別な訓練や学習を経て身に付けられた特別な要素ではない。即興的な掛け合いの過程が、私たちが会話をする過程と似ているからである。会話に元歌の節や拍が付随したものが即興的な掛け合い歌と言える。また、即興的に歌で掛け合う場面では、子供は手拍子による拍の共有を行っており、これが音楽のまとまりや掛け合いの継続をつくっていると同時に「掛け合いを続けたい」という心情の共有も行っている。そして、この「掛け合いを続けたい」という心情は、歌に合わせて自分のことや相手のことを伝え合える楽しさがあるからこそ生まれるものなのである。

【引用・参考文献】

- 1) 伊野義博(2017)『掛け合い歌のメカニズムを応用した音楽学習の研究－ブータンのあそび歌ツァンモとカプシューを中心とした調査をもとに－』科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書, 平成26-28年度
- 2) 伊野義博・加藤富美子・黒田清子 他(2014)『『掛け合い歌』の教育学Ⅰ』『音楽教育学』第44号-2号, 日本音楽教育学会, pp.90-94
- 3) 伊野義博・永井民子 他(2017)「音楽授業における〈掛け合い歌〉の実践的研究」新潟大学教育学部研究紀要第9巻第1号, pp.125-155
- 4) 伊野義博(2010)「日本語をうたうことからの出発－教員養成への一つの提言」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会, pp.39-49
- 5) 拙論(2018)「子供が歌をつくる過程の研究－わらべ歌を元歌にした、音楽づくりの実践から－」『教育実践研究』第28集, 上越教育大学学校教育実践研究センター, pp.103-108
- 6) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告知)解説 音楽編』, 東洋館出版社, p.9